SeijoUniv.

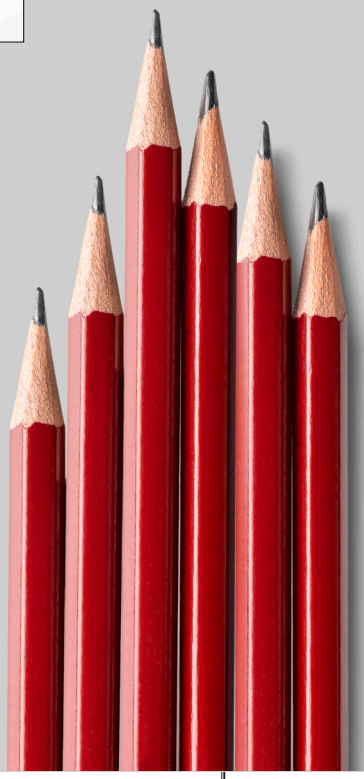
Curator Course NewsLetter

成城大学学芸員課程ニュースレター

Newsletter from Curator COURSE of Seijo University

SEPTEMBER 30. 2023

vol. 08



CONTENTS

§ 1 - 巻頭言 「シンポジウム「学芸員という仕事」に寄せて」
成城大学文芸学部教授　岩佐光晴

§ 2 -「種を蒔く仕事」
栃木県立美術館 研究員　大城茉里恵

§ 3 -「人生を変える作品との出会い」
東京国立博物館 研究員　高橋真作

§ 4 -「次の世代につないでいく仕事」
文化庁 調査官　玄蕃充子

§ 5 -「未来のミュージアム体験にむけて」
大日本印刷株式会社　田井慎太郎

§ 6 -「誰もが楽しめる博物館」
東海大学 准教授　篠原聰

§ 7 -「学芸員になってぼんやり考えたこと」
横浜市歴史博物館 学芸員　吉井大門

§ 8 - 編集後記

POINT

学芸員課程カリキュラム

学芸員資格取得要件（文芸学部生のみ対象）

成城大学で学芸員資格を取得するためには、まず学芸員課程に登録し、各種ガイダンスに出席したうえで、①と②を満たす必要があります。

①「必修科目」19 単位、「選択科目」を２系列以上にわたって８単位以上修得

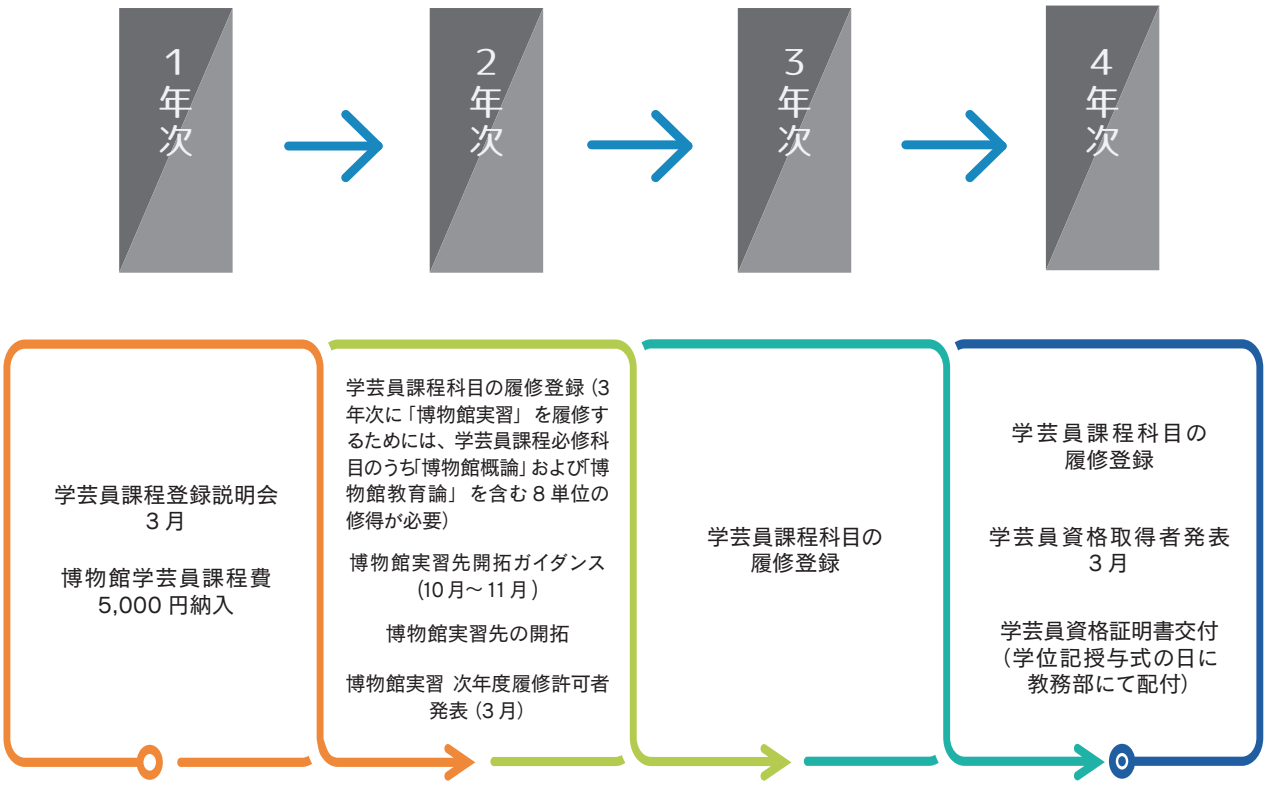
② 学部を卒業（学士の学位を取得）する

大学院生の場合は、①を満たした時点で資格が取得できます。

なお、「必修科目」のうち、博物館実習については、学内での講義のほか、博物館や美術館等で実習を行う必要があります。

※詳細は文芸学部「履修の手引」を参照してください。

・学芸員資格取得までの流れ



学芸員資格取得の最大の関門となるのが博物館実習です。博物館実習先については、各学生の希望に基づき、学内選考や各館園での選考の後、決定されます。事前に様々な館園を訪問し、特色や展示方法等を学ぶとともに、履歴書の書き方や自己 PR、志望動機など事前に準備をしておきましょう。

令和５年度　博物館実習先館園（予定）

足利市立美術館　岩手県立博物館　永青文庫　香川県立ミュージアム　賀川豊彦記念松沢資料館　葛飾区郷土と天文の博物館　川崎市立日本民家園　群馬県立館林美術館　さいたま市立博物館　相模原市立博物館　芝山町立芝山古墳・はにわ博物館　シルク博物館　世田谷区立郷土資料館　世田谷文学館　茅ヶ崎市美術館　千葉県立関宿城博物館　東京国立博物館　東京都江戸東京博物館　東京都現代美術館　遠山記念館　日本民藝館　練馬区立美術館　東村山ふるさと歴史館　平塚市美術館　府中市美術館　目黒寄生虫館　山梨県立博物館

巻頭言

シンポジウム「学芸員という仕事」に寄せて

成城大学文芸学部教授
岩佐光晴

本学の文芸学部に学芸員課程が設立されて、本年で五十周年を迎えることになる。そのことが話題になったのは、昨年の九月に行われた本誌の編集会議の席上のことであった。設立以来、本学は数多くの学芸員を世に送り出してきたが、現在も本学出身の学芸員は全国の美術館・博物館を中心に活躍している。このことは、内外に誇れる本学の良き伝統の一つとなっていることは確かであり、この機会に、本学出身の現役の学芸員を招いてシンポジウムを行い、本学に学芸員課程が設立された意義を再確認してはどうかという意見が出され、話として大変盛り上がった。

当初は本学出身の学芸員経験者が一堂に会しての親睦の機会とし、あわせて現役の学生との交流の場となることをイメージしていたが、本年はまた文芸学部創設七十周年に当たることから、本シンポジウムはその記念事業の一環として実施することになった。この記念事業は高校生を対象に行われることになっていることもあり、現役の学生も含めて、一般には馴染みの少ない学芸員という仕事の内容とその魅力について、理解を深める機会とすることに方針を転換した。

「学芸員」や「キュレーター」という言葉は、私が学生の頃と比べれば、世の中に大分浸透してきてはいるが、その仕事の内容を具体的にイメージできる一般の人はまだまだ少ないのではなかろうか。前号の巻頭言でも書いたように、学芸員の仕事は美術作品などの資料の収集、保管、展示、調査研究や関連業務など多岐にわたるため、その内容を一言で説明することがなかなか難しいことがその要因になっていると思われる。さらに学芸員という仕事は専門性が高いために、学芸員として就職するためには、大学院でさらに学ぶ必要があり、一般の学生には労力的にも経済的にもかなりハードルが高くなってしまい、ますます馴染みのないものとなっているのが実情である。しかし、そうした苦労を経ても学芸員の仕事には計り知れない魅力や面白さがあることを、学芸員出身の私としては、多くの学生に伝えたいという強い思いがある。今回のシンポジウムを通して、高校生には、世の中には学芸員という魅力的な職業が存在することを認識していただくこと、そして本学の学生には、多くの学芸員を輩出してきた本学の古き良き伝統に連なる人が一人でも多く出てくることを期待したい。

シンポジウムのコーディネートは本誌の編集を創刊号から手掛けていただいている、本学出身の篠原聡さん（東海大学准教授。現在、本学の学芸員課程科目も担当）と吉井大門さん（横浜市歴史博物館学芸員）にお願いした。登壇者はいずれも本学の文芸学部及び大学院文学研究科の出身者で構成した。高橋真作さん（東京国立博物館）と大城茉里恵さん（栃木県立美術館）は博物館や美術館で、玄蕃充子さん（文化庁）は文化財に関わる行政機関で、田井慎太郎さん（大日本印刷株式会社）は企業の文化事業部門で活躍されている。学芸員の仕事は博物館・美術館に限定されるのではなく、国や地方自治体の文化財行政、さらには一般企業の文化事業へと多様な広がりを示している。様々な舞台で活躍されている諸先輩の話を通して、多くの高校生や大学生に、学芸員の仕事に興味を持っていただく機会になればと願っている。

種を蒔く仕事

大城 茉里奈
栃木県立美術館 研究員

私は元々、別の大学で英文学と言語学を学んで卒業してから成城大学に来ました。大学三年生のときに、文学の授業で不思議な挿絵に出会ったのがきっかけで、美術を学べる大学で挿絵を研究してみたいと思ったのです。一方で、当時は一般企業への就職活動も行っていました。非常に景気の悪いときで就職難だったので、一度就職して貯金ができてから大学院に進んでもいいかなと思っていました。ところが、大学四年生のときに東日本大震災が起こり、面接に進んでいた企業から採用中止の知らせが来るようになりました。このまま就職活動を続けても希望する職業には就けそうにないと思い、それならやりたいことをやれるときにやろうと考えて、美術を学べる大学を探すことにしました。

美術の中でも実技ではなく、美術の歴史、美術史を学べる大学は実は多くはありません。オープンキャンパスでは四、五件まわって自分に合う大学を探しました。私が研究したいと思っている挿絵は、物語の内容を描いたり、演劇や音楽の内容を描いたりするので、美術が学べるだけでなく、芸術全域を学べる大学が良いと思いました。そこで見つけたのが美術、演劇、音楽、映画、美学を総合的に学べる成城大学の芸術学科です。また、成城大学は学芸員を多く輩出していることもあり、卒業後の進路を見通しやすかったのも決め手となりました。私は美術についての知識が何もなかったので、いきなり大学院に進んでも、研究はうまくいかないだろうと思い、学士編入という一度大学を卒業した人が三年生に編入できる制度で試験を受けて入学し、美術史の基礎を学ぶことにしました。

入学当初は芸術学科の必修科目を履修するため一年生から三年生の授業までとりました。クラスメイトはみんな年下で上手くやれるかなと思いましたが、芸術学科は様々な趣味を持つ人が多く、共通の話題ですぐに仲良くなることができました。同じゼミの仲間は今でも仲が良く、同じく学芸員になった仲間とは情報を交換したり、お互いの美術館に行ったりして励まし合っています。

成城大学は小さな大学なので、学生同士と先生との距離が近いことが魅力でした。最初に通った大学は大規模な大学だったので、大教室での授業が多く、先生とコンタクトをとることも難しかったのです。芸術学科の先生方は熱心で丁寧な指導をしてくださり、芸術について何も知らなかった私も深い理解と知識を得ることができました。編入学からわずか二年で卒業論文を書き上げることができたのは、先生方の指導のおかげです。

大学院では修士が二年しかないので、一年目に美術館の就職活動に備えようと思い、国立西洋美術館でインターンシップに参加しました。美術史については大学院の授業で学ぶことができますが、美術館での実務についてはやはり現場に飛び込むのが一番です。私は美術館の活動の中でも教育普及に関心があったので、活動が盛んな国立西洋美術館でインターンをすることにしました。そこでは美術館教育の理論と実際を学び、夏休み中には小中学生にギャラリートークをするなど、貴重な体験をすることができました。

私が学芸員という仕事を知ったのは高校生のときに参加したオープンキャンパスで、漠然と博物館施設で仕事をしてみたいという気持ちはありました。小学生のときに不登校をしていたことがあったのですが、学校に行けないときに先生が休日に動物園や科学博物館に連れて行ってくれました。博物館施設は資料を展示するだけでなく教育機関でもあります。先生は学校以外にも学ぶ場所があることを教えてくれ、私の世界は広がりました。それからは何かを調べて博物館に行くことが好きになり、勉強することがとても楽しくなり、また頑張って学校に行ってみようと思えるようになりました。そんな世界を広げてくれた博物館施設と先生に恩返しがしたい、私みたいに困っている子どもがいたら力になりたいという想いから学芸員を目指すこととなりました。学芸員は狭き道で就職活動は難航しましたが、成城大学では学芸員出身の先生もおり、先生方の力添えもあって学芸員の職を得るこ

とができました。

現在、栃木県立美術館では展示や研究のほか教育普及を担当しています。美術館といえば展覧会が花形に思われるかもしれませんが、美術館を知ってもらう活動として教育普及は重要です。極端な言い方ですが、一生のうちに一度も美術館に行かなくても困ることはありません。それでも、美術館という場が人生をより豊かにする可能性があるなら、私は美術館にぜひ来てほしいと思います。そのためには、美術に馴染みがない人も楽しめるイベントを企画したり、作品について解説をしたり、ときにはテレビやラジオに出演したりして声を届けます。

私が重視しているのは学校との連携です。課外授業や遠足で美術館を訪れる学校の中には、初めて美術館に来る子どもがたくさんいます。作品の見方が分からないとつまらないと思う子もいるかもしれません。そんなときに一緒に対話しながら鑑賞すると、面白いと言ってくれます。初めての美術館が楽しければ、いつの日かまた美術館に来てくれます。その日は明日かもしれないし大人になってからかもしれませんが、その人たちに種を蒔いていつでも待っています。

作品を好きになってもらうこと、美術館を知ってもらうことは、作品が将来にわたって大事にされること、保存されることにも繋がります。作品を後世に残し伝えていくためには、物理的な保管だけではなく、物を大切に思う人の心が必要だと思います。そして、地方の美術館にとってはその地ゆかりの作家を収蔵し普及することは、アイデンティティの形成にも繋がります。県民の心の拠り所になる場でもありたいのです。

もちろん、作品を普及するためには、日々の調査と研究が欠かせません。栃木県立美術館では約九〇〇〇点の作品を所蔵していますが、作品や作家について調べて展覧会を企画したり、資料を集めることが美術館活動を支えています。私は版画を担当分野としていますが、栃木県には県出身の版画家が多く存在し、美術館のコレクションでも重要な位置を占めています。本を読んで調べるだけではなく、地元の作家や関係者に話を聞いて色々教えてもらったり、関連する展覧会に足を運んだり地道な活動が続きます。

こうした研究活動を支えているのが、大学時代に培った調査方法や作品や論文を批評する力です。大学でも大学院でも論文を丁寧に読む授業がありました。著者が言おうとしていることを的確につかんで理解するだけでなく、その主張や論証方法は適切か批判的に向き合わなければいけません。積み重ねられた研究を理解し、ときに批判することから新たな研究成果が生まれます。当然、展覧会もただ作品を綺麗に並べればいいわけではありません。作品がどんな文脈を持っているのかを知り、歴史の中でどのように位置づけられるのか、研究の意義はどこにあるのかを明らかにしなければいけません。

私は学芸員になろうと思って成城大学に来て、大学で学んだことがすべて仕事に直結していますが、こうした調査力や批判力は学芸員だけに役立つものではありません。社会では自分がやろうとしていることの根拠を示し論理的に説明する機会は多くあります。そんなときに物を観察し、入念に資料を調べて、言葉で表現することを研究方法とする芸術学科での学びは役に立つと思いますし、美術館で作品を鑑賞するときにもより深い理解が得られると思います。ぜひそんな目と豊かな感性を養い、様々な人や物と出会って世界を広げていってほしいと思います。

人生を変える作品との出会い

高橋真作
東京国立博物館研究員

何かしらそうした視覚体験＝「人生を変える作品との出会い」を持っているように思います。何と言っても学芸員は、自分が好きな作品をじっくりと見て、触れて、調べて、他の人にその面白さを伝えることが仕事なのです。そしてそうした面白さは、まずは自分自身が一番に「面白い！」と思っていないとなかなか伝わらないものです。まさしく「作品が好き」という情熱こそが、学芸員という仕事を支えているといってもよいでしょう。

「作品が好き」という人にとって、学芸員とはまさに夢のような仕事かもしれません。実際、私も日々の仕事をとても楽しく感じながら過ごしています。むしろ、こんなに幸せな職業はほかにあるまい、と思うくらいです。もちろん、ただ作品について調査するだけではなく、仕事にあたっては館の内外でさまざまな人々とコミュニケーションを築いていかなければなりませんし、展覧会を成功させるための総合的な調整力と実行力も必要となってきます。あるいは、「雑芸員」と揶揄されるほどに日々の業務は雑多で多忙を極めますが、それをカバーして余りある魅力とやりがいが、学芸員にはあります。

私の場合、13年半ほど鎌倉市の博物館施設で学芸員を務めた後、2018年10月より東京国立博物館（以下、東博）に配属となりました。鎌倉での仕事のことは以前（ニュースレターVol.2）にも書きましたので、今回は東博での業務内容について簡単に紹介しておきましょう。ご承知のとおり東博は、日本で一番古い歴史を誇る博物館で、2022年に創立150周年を迎えました。収蔵品の質と量、展示場の面積、事業規模と予算、職員数など、どれを取っても鎌倉の時とは桁違いで、移籍した当初は戸惑う場面ばかりでした。東博内では中世の水墨画などを担当し、平常展示の陳列案や展示替え作業、作品の貸出、修理監督、講演会など、さまざまな学芸業務に携わっています。2年間ほど「文化財活用センター」にも異動し、美術作品を用いたデジタルコンテンツの監修などにも従事しました。現在は「特別展室」に所属し、マスコミ共催による大規模展覧会のマネジメント業務も担っています。

私が主担当を務めた特別展「東福寺」も2023年春に実施されました。東福寺は、秋の紅葉で有名な京都の禅寺ですが、じつは禅宗美術の宝庫とでも呼ぶべきお寺なのです。そのなかで、展覧会のメイン作品として位置付けたのが、東福寺で活躍した伝説の絵仏師・吉山明兆による「五百羅漢図」でした。全50幅で描かれた、日本美術史上においても特筆される大作ですが、この作品との出会いもまた、私の学芸員人生のなかで大きなターニング・ポイントになったように思います。

とくに、展覧会の準備の過程で、行方不明となっていた五百羅漢図のうちの1幅が、ロシアのエルミタージュ美術館で再発見されたことは、きわめて大きな成果でした。全国紙の一面にも取り上げられるなど、学術的にはもちろん、社会的にも意義のある発見だったと思います。もちろんこうした探索が実現できたのも、海外のミュージアムとの広範なネットワークを有する「国際交流室」の尽力など、一流のプロフェッショナルが集う東博という職場環境があったからこそ。本展では、ひとつの作品が結集核となって大きなムーブメントが形成されていく過程を身をもって体感するとともに、改めて学芸員という仕事の醍醐味を存分に味わうことができたように思います。

これから（あるいはこれまでも）、どこかで心動かされる作品やコンテンツに出合ったとき、もしかしたらそれは、あなたの人生を変えるだけの可能性を秘めているのかもしれません。学芸員を目指す、目指さないにかかわらず、ぜひじっくりと向き合ってみることをオススメいたします。

「アシュラマン」という漫画キャラクターをご存じでしょうか。1980年代に『週間少年ジャンプ』に連載されていた人気漫画『キン肉マン』に登場する悪魔超人の一人です。腕が６本、顔が３つあるのが特徴で、必殺技は「アシュラバスター」。主人公のキン肉マンが使う「キン肉バスター」とも似ていますが、腕が６本あるぶん、対戦相手をよりしっかりとホールドでき、技の完成度としてはこちらのほうが格段に上なのです。子供の頃、私が一番好きな超人キャラでした。

何ゆえにこんな話から始めたかというと、このアシュラマンに基づく後日談が、私がこれまで歩んできた道のりにも、何かしらの影響を及ぼしていると思われるからです。それは、私が『キン肉マン』に熱中していた小学校何年生かの頃のこと。休み時間中に何げなく図工の教科書をパラパラめくっていると、何とそこに、アシュラマンととてもよく似た、ある仏像が載っていたのです。そう、奈良・興福寺の阿修羅像でした。

６本の腕に、３つの顔。それを見た瞬間、漫画キャラの「元ネタ」を暴いたような手柄に興奮するとともに、凛とした阿修羅像の姿に逆に一目ぼれしてしまいました。仏像を「カッコいい！」と感じた最初の瞬間だったように思います。私は教科書の阿修羅像をハサミで切り抜き、秘かに自分の椅子の裏側に貼って一人愉悦にひたっていました（もちろん、あとで先生にばれて怒られました）。

阿修羅像だけでなく、その頃から何となく古いもの、前近代的な匂いのするものが好きで、とくに水木しげる大先生の妖怪画などは大好物でした（今でも好きです）。仏像や仏教美術への関心もずっと継続していたことから、大学も芸術学科に進学して日本美術史のゼミに所属しました。でも、かといって真面目に勉学に励んだかというと、まったくそんなことはなく、学部時代を一言でいえばまさに「バックパッカー三昧」。普段はろくすっぽ授業にも出ないでアルバイトに勤しみ、夏休みや春休み期間を丸々使って、インドやタイ、カンボジア、ラオスなど、アジア各地への貧乏旅行に明け暮れていました。

そんな感じなので、どちらかと言えば（というより確実に）「落ちこぼれ学生」に近かったのですが、卒論ゼミの際に出会ったある作品が、また私の人生に大きく作用することになりました。それは、狩野元信という室町時代の絵師が描いた「富士曼荼羅図」という作品です。卒論テーマを決め切れない私に、「こんなんもありまっせ」とゼミの先生が紹介してくれたものでした。東海道から富士山頂に至る広大な富士信仰圏の景観を収めた絵画作品で、富士が包み込む聖域にはおびただしい数の参詣者が描き込まれています。聖と俗、虚と実、和と漢といった対立項が混然一体となって画面内でせめぎ合う、不思議な魅力をたたえた作品でした。

これまた見た瞬間に一目ぼれし、以降、この作品について調べを進めていきました。気が付くと、いつの間にやらすっかりと「研究」の面白さにハマってしまい、一念発起して大学院へと進学したのでした。基礎ができていない分、入学後は死に物狂いで勉強しましたが、何とか修士論文も書き上げ、その成果を学会発表しました。その後いくつかの論文にもまとめて、作品研究としてはひとまず一区切りとなりましたが、狩野元信については今現在も研究を続けています。

ちょっと昔話が長くなりましたが、ここで言いたかったことは、「作品との出会いが人生を変える」（こともある）ということ。阿修羅像しかり、富士曼荼羅図しかり、後述する五百羅漢図しかり。美術作品だけに限らないかと思いますが、こと学芸員という仕事に就いている人は、

次の世代につないでいく仕事

玄蕃充子
文化庁 調査官

文化庁で民俗文化財の調査官をしております、玄蕃充子と言います。成城大学には学部から大学院博士課程後期まで在学し、民俗学を専攻していました。三十年程東京で暮らしていましたが、文化庁の京都移転にともない、今春から京都に居を構えています。東北生まれ、東京育ちの私にとって、初めての京都での生活は、気候の面でも習慣の面でも驚くことが多く、刺激的な日々を送っています。

さて、文化庁の文化財調査官ときいて、どんな仕事を想像するでしょうか。調査官とはいったい何者なのか？学芸員ではないのか？と首を傾げる方もいらっしゃることでしょう。

ここでは、学芸員として自治体および郷土資料館に勤務していた経験と、文化庁での文化財調査官の仕事をとおして、学芸員の可能性の一事例を紹介できればと思います。

私が文化庁に文化財調査官として入庁したのは、令和四年四月のことです。前職は、船橋市教育委員会の民俗担当学芸員として文化課に四年、郷土資料館に一年務めていました。文化課での仕事は、市内で行われる祭礼や神楽等の文化財の調査、文化財の保存団体との窓口や教育委員会が所有している民俗資料の整理、保存・管理と活用でした。郷土資料館での仕事は、収集された資料の整理と新たな寄贈の受け入れ、資料のリストや台帳を作成し、調査・研究を行い、企画展示や常設展示で公開・活用していくほか、見学や出前授業等の学校連携、文化財の調査、レファレンス対応、地域誌の作成、次年度の予算案作成、災害時対応、時には自治体の職員として選挙事務や国勢調査指導員を務める等多岐に渡りました。地方自治体の学芸員は、なんでも屋と称されることがありますが、思い返すと本当に多様な仕事に携わることができたと思っています。

資料整理作業に参加しました。学芸員実習では、登録有形民俗文化財である山梨県甲州市の「勝沼のぶどう栽培用具及び葡萄酒醸造用具」の資料整理と実測図の作成を行い、また事前調査で携わった埼玉県上尾市の「上尾の摘田・畑作用具」は令和３年に重要有形民俗文化財に指定されました。文化財を直接取り扱う経験、自分が携わった資料が文化財となる経験は、文化財の保護を意識する大きな契機となりました。

一方で、文化財保護が包括する課題について考えさせられることもありました。大学院の授業で行った千葉県指定無形民俗文化財「野田市三ツ堀のどろ祭り」の現状確認調査と祭礼用具恣意調査では、地域社会の変容にともなう世代間の意識の変化が、当該地域における無形民俗文化財の継承を困難にしている現状に向き合うことになりました。また、船橋市教育委員会文化課では、登録有形文化財の建造物の登録抹消の業務に携わることになり、文化財を保護していく難しさを痛感することになりました。

学芸員として郷土資料館で働く傍ら、常に頭の中にはどうしたら文化財を、民俗資料を守り、継承していくことができるだろうかという思いがあり、公募をきっかけに、文化財保護の本拠地ともいえる文化庁へ飛び込むことにしました。

では、文化庁の民俗文化財の調査官としてどのような仕事をしているのかというと、民俗文化財の指定・登録・選択（記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）、文化財の民俗文化財でしたが、現地調査では、学芸員として地域の文化財調査を行っていたフィールドワークの経験を活かすことができました。学芸員の資格を取得するための講義や実習、学生時代に各地で行った文化財に関する現地調査や資料整理作業、そして船橋市郷土資料館で働いていた経験が文化財調査官の仕事に活かされていると感じています。

私は、学芸員資格を持ち、学芸員として働いていましたが、現在は学芸員ではありません。でも、学芸員のスキルを活かして文化財調査官として従事しています。

学芸員が持つスキルは、美術館や博物館という場所だけではなく、多様な可能性を持っていることが少しは伝わったでしょうか？

最後に、私は、学芸員と文化財調査官に共通する観念があると思っています。それは、学芸員も文化財調査官も「次の世代につないでいく」仕事だということです。私は、文化財の保護および管理、活用に携わりたいと考え、学芸員の資格を取得し、現在は文化財調査官として闘っています。ですが、文化財調査官がゴールではありません。文化財をどのように保護し、次の世代に継承していくのか、私はこれからも考え続けていきます。

学芸員の資格取得を目指すみなさんも、学芸員としてなにをしたいのか、学芸員のスキルでなにができるかを考え続けて欲しいと思っています。

毎日試行錯誤しながら民俗資料と向き合っていた中で、文化庁の民俗文化財調査官の公募という転機が訪れます。博物館や美術館の学芸員も文化財調査官も狭き門で、頻繁に募集があるものではありません。文化財調査官の公募のタイミングは、私にとって人生を左右する大きな選択でした。正直、学芸員として卵の殻をつけたような未熟な状態で、文化財調査官を目指すことに迷いはありました。なぜなら、私はまだ郷土資料館で自身が納得のいく学芸員としての仕事ができていたとは到底思えなかったのと、引き継ぐ職員に多大なる迷惑を掛けることが分かっていたからです。地域の博物館や郷土資料館は常に人員不足です。学芸員が一人辞めるということは、郷土資料館にとって大きな打撃や摩擦を生むことはたった一年の勤務期間でも分かりました。

それでも、文化財調査官の道を選択したのは、成城大学・大学院や船橋市教育委員会での文化財に関するいくつかの経験があったからです。

私が成城大学を進学先に選んだのは、幼い頃から祭りや年中行事に興味関心があったという理由があります。大学卒業後は民間企業に就職しましたが、学芸員として文化財保護および管理、活用に携わりたいと考え、文学研究科日本常民文化専攻に進学しました。私が学芸員の資格を取得したのは、大学院に進学してからです。大学院では、小島孝夫先生指導の元、全国の文化財に関する現地調査や保存・修理に係る業務を行っています。具体的には、民俗文化財の候補となる祭り・行事および民俗資料を調査し、指定・登録・選択に向けて資料の作成や調整を行うほか、文化財修理の指導管理、文化財を公開する際のアドバイス等も行います。七月に京都で行われる祇園祭の山鉾巡行は、「京都祇園祭の山鉾行事」として重要無形民俗文化財に指定されていますが、その山鉾のうち二十九基は、重要有形民俗文化財「祇園祭山鉾」としても指定されています。重要有形民俗文化財の修理を行う場合、染織や金工、木工等の専門家が監修を務め、調査官がアドバイザーとなるため、重要有形民俗文化財として適正な修理であるか判断するには、山鉾を構成する部材の名称・材質、その取り扱いや修理方法に関する知識が求められます。例えば、ある山鉾の染織幕を修理するとなると、前掛の復元新調で、絹糸の諸糸による綴織というように幕の種類、素材や織り方等が分からなくてはなりません。なお、私は、染織分野は専門外だったため、関係する資料や論文を読み漁り、織物の職人さんや専門家の先生にご教示いただきながら日々勉強しています。

また、山鉾が収められている収蔵庫の改修には、温湿度等の空調管理や虫菌害防除、防災・防犯等の施設管理の知識が必要ですが、船橋市で資料の保存管理や施設の環境管理に携わった経験が役に立っています。私が初めて指定・登録・選択業務で携わったのは無形の

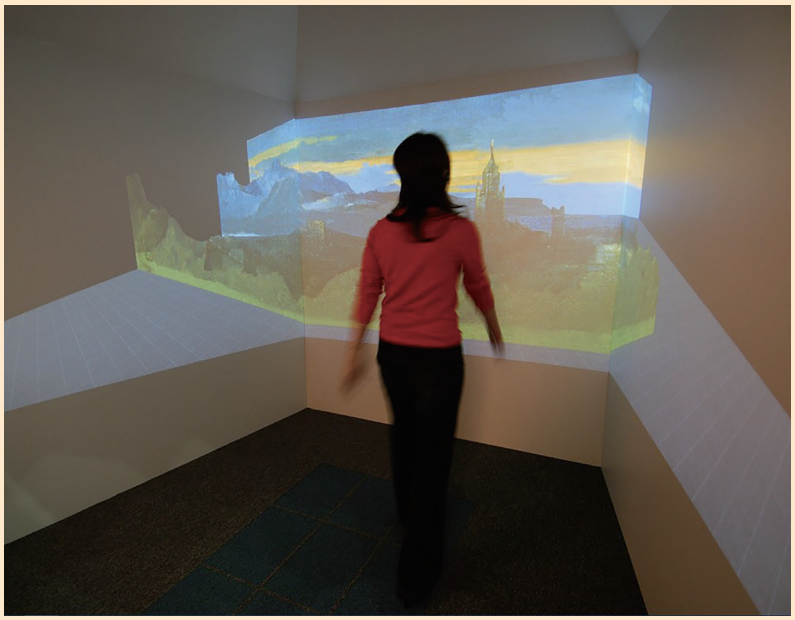
未来のミュージアム 体験にむけて

田井 慎太郎
大日本印刷株式会社

私の所属する大日本印刷株式会社（ＤＮＰ）は、持続可能なより良い社会、より快適な暮らしの実現に向けて、新しい価値を国内外に提供し続ける総合印刷会社です。「未来のあたりまえ」をつくる会社として、「Ｐ＆Ｉ」（印刷と情報）の強みを掛け合わせ、様々な領域のお客様に幅広い分野の製品・サービスを提供しています。私は学芸員ではありませんが企業に所属して「ミュージアムの未来のあたりまえ」を考える仕事に携わっており、一般的な学芸員の仕事とは異なる点は多いですが、ミュージアムに関わる仕事の一つの可能性としてご紹介できればと思います。

まず少し私の背景について述べさせていただきます。父が洋画家だった事もあり、幼少期から絵に囲まれ生活をしていました。両親の影響で文化芸術全般にも親しむようになり、自然と「この魅力を広く人々に伝えたい」という想いが芽生えました。そのため、学芸員への道を選び、大学で西洋美術史を専攻し学芸員資格を取得し、さらに、大学院では成城大学に在籍し、美学・美術史専攻 修士課程を二〇〇九年に修了しました。

大学院に在籍中、偶然にも、ＤＮＰの文化事業に触れる機会がありました。恩師の千足伸行教授が関わっていた「ルーヴルーＤＮＰミュージアムラボ」（※二〇〇六年～二〇一八年、ＤＮＰとルーヴル美術館による共同プロジェクト）を鑑賞し、そこでルーヴルの貴重な作品の展示と、ＤＮＰの印刷と情報の技術を組み合わせた鑑賞システムによる、全く新しいミュージアム体験を目の当たりにしました。【写真１】この体験は私にとって斬新で、新たな視点を与えるものでした。それまでは学芸員になり研究成果を展覧会に還元したい気持ちでいましたが、「ミュージアムラボ」を見てから、様々なテクノロジーを組み合わせ、新しいミュージアム体験をプロデュースしたい…という気持ちが沸き上がってきました。企業に所属して「文化芸術の魅力を広く伝える」事も可能なのだと気付いた瞬間でした。



【写真１】ルーヴル DNP ミュージアムラボの鑑賞システムの一例
©Dai Nippon Printing Co., Ltd.

大学院修了後、ＤＮＰに入社し、様々な体験展示の業務に携わりました。この業務では、美術史の知識や学芸員資格よりも、プロジェクトマネジメント、人間の認知や行動、及び最新デジタル機器の動向も踏まえた鑑賞システム設計等のスキルが要求される世界でした。

これらのスキルの習得は、最初は苦労しましたが、周囲から助言を受けながら、自分なりのやり方を獲得できたように感じます。また、美術史や学芸員資格の勉強で得た事が活きる場面も度々ありました。お客様である学芸員の立場になって課題を考えたり、より美術史的内容に踏み込んだ企画提案が自然と行えたように感じています。

二〇一八年、フランス国立図書館（BnF）とＤＮＰの新たな共同プロジェクトの仕事を担当することになりました。ＢｎＦは十四 世紀に創設され、歴代フランス国王から受け継いだ四〇〇〇万点以上のコレクションを収集・所蔵・公開する世界屈指の図書館です。そのＢｎＦの中の一つ、「リシュリュー館」は三百年ぶりの全面改修にむけた「リシュリュー・ルネサンス・プロジェクト」が進行しており、図書館内にミュージアムが新設されてリニューアルオープンする予定で、そのプロジェクトにＤＮＰがアジア唯一の技術メセナパートナーとして参加するという内容でした。

プロジェクト開始にあたっては、会社としてプロジェクトに取り組む目的を明確にし、具体的な実施内容を決定する必要がありました。その為には十～二十年後の将来のミュージアム市場や文化芸術の動向を想像する事が重要でした。様々な議論の末、MLA（Museum：美術館・博物館／Library：図書館／Archives：文書館）が連携した「新しい文化体験のモデル」を構築し、その活用・普及をミュージアムへ推進する事を目的と定めました。この背景には、近い将来、日本でもMLA の施設の

【写真2、BnF リシュリュー館のマザラン・ギャラリー】
© DNP Dai Nippon Printing Co., Ltd. 2022, with the courtesy of the Bibliothèque nationale de France.

多様な収蔵品のデジタルアーカイブが加速し、多種多様な収蔵品、知的情報が施設の枠組みを超えて横断的に利用できる「未来のあたりまえ」が訪れる事が予想されたからです。

（※「新しい文化体験のモデル」とは、多様な資料・作品をデジタル化し、MLA施設の枠組みを超えて情報連携させ、それらをリアル施設およびオンラインにおける鑑賞システムに利活用することにより、生活者が新しい知識と出会い、興味を拡げる一連の体験を指す）

プロジェクトの主な実施内容としては二つありました。一つ目は、ミュージアムに展示されるコレクション二十一点と歴史的な空間「マザラン・ギャラリー」の3Dデジタル化、二つ目は、リシュリュー館への鑑賞システムの導入でした。

一つ目のコレクションの3Dデジタル化では、これまで技術的に撮影が困難とされてきた、光を反射する素材の作品等が対象でした。また、空間の3Dデジタル化では、「マザラン・ギャラリー」は大規模な天井画（幅八m、奥行四十五m）を三次元データとして高精細にデジタル化する必要がありました。社内の専門スタッフと対話を重ね、最終的に高品質なデータを納品する事ができました。

二つ目の鑑賞システムでは、「マザラン・ギャラリー」の3Dデータを活用しました。ディスプレイにタッチする事で、普段は近付いて見る事ができない「マザラン・ギャラリー」の天井画を様々な角度や大きさで鑑賞できます。また、天井画に描かれた神話の場面の説明等の「みどころ」も閲覧できます。この「みどころ」の情報については、BnFによってデジタル化された様々なMLAの関連資料が使われています。この鑑賞システムは、実際に天井画のある「マザラン・ギャラリー」内に設置されていますが、解説を見られるというだけではなく、新しい知識と出会い、興味が広がるように意識的にコンテンツの構成を設計しました。

そして、二〇二二年九月にBnFリシュリュー館はリニューアルオープンしました。このプロジェクトでDNPがデジタル化した作品と空間のデータは、新しいミュージアムの随所に利用されています。DNPの鑑賞システムについては、「実際の天井画と画面を交互に見ている人やみどころ情報を熱心に見ている人等、大変多くの人が利用している」とBnFから伺いました。その時、自分は学芸員の道は選ばなかったけれど、この仕事をやっていて本当によかったと感じました。【写真2、3】

私は現在、デジタル化と鑑賞システムを軸とした事業開発を通じて、「新しい文化体験のモデル」をミュージアムに活用・普及する業務に携わっております。MLAの枠を超えて、教育や観光、福祉、企業等と連携した事業を実現すべく、日々試行錯誤しています。社会や市場の状況は日々変化しており、「未来のあたりまえ」は常にアップデートしていく必要があります。そのためにはスピード感や柔軟性を意識した仕事の取り組みが必要であり、大変な事も多いです。しかし、それでもやりがいをもって取り組めるのは、「文化芸術の魅力を広く伝えたい」という気持ちを持ち続けている事と、大学の時に学んだ美術史、学芸員資格が常に私の知識の基盤になっているからだと思います。

もし、これから学芸員資格を取得したり、文化芸術に関わる仕事に就きたいと思っている方がいらっしゃれば、ぜひこの機会にご自身の目的やビジョンを想像してみてください。ミュージアムをとりまく状況が変化して、仕事の内容や手段が変わったとしても、目的・ビジョンに立ち返る事で多くの道筋や可能性が開けると思います。

この文章が、学芸員に関わる仕事の一つのポジティブな可能性として受け取っていただければ幸いです。

【写真3、マザラン・ギャラリーの鑑賞システム】
© DNP Dai Nippon Printing Co., Ltd. 2022,
with the courtesy of the Bibliothèque nationale de France

誰もが楽しめる博物館

篠原聰

ユニバーサル・ミュージアムとは？

大英博物館のような世界的な博物館をユニバーサル・ミュージアムと呼ぶことがあります。ユニバーサルには「宇宙、全世界的な」という意味があるからです。この場合、旧植民地諸国などからの文化財返還要請をかわすといった政治的な意味合いも帯びています。過去に略奪した文化財を人類共通の普遍的なコレクションと捉え、先進国の大規模な博物館が世界を代表して保管するのだ、という考え方です。他方、ユニバーサルには「普遍的、全てに共通する」等の意味もあります。すべての人が使いやすいデザインをユニバーサルデザインと呼びますが、そこから派生してユニバーサルデザインを取り入れた博物館のことを日本ではユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）と呼ぶようになりました。一九九八年に神奈川県立生命の星・地球博物館で開催されたシンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムをめざして―視覚障害者と博物館」が最初です。奇しくも一九九八年は私が成城大学を卒業した年でしたが、当時は博物館の専門的職員として学芸員がいることすら知りませんでした。私が学芸員の資格を取ったのは大学院に入ってからです。

使命を見つけることが人生を豊かにする

大学院では他大学の講義もモグリで受けていました。その中に車いすの先生がいて、一緒に美術館巡りをする時、車いす目線だと作品が見えにくいことを知りました。東海大学に職を得てからは全盲の友人もできました。国立民族学博物館の研究者です。彼が主催するユニバーサル・ミュージアム研究会に参加するなかで、視覚障害者向けのハンズ・オン（触る）展示が私たちも楽しめること、視覚優位の世界にあって目が見える私たちこそ「触覚」の魅力を再確認すべきことを学びました。私は自らの使命を見つけました。「使命」と書くと堅苦しく聞こえるかもしれませんが、どんな仕事でも自らの使命を見つけ、全力全開でチャレンジすることが人生を豊かにします。私の使命はユニバーサル・ミュージアムの実現です。国籍や人種、性別、年齢、障害の有無、社会的身分や経済的地位などを問わず、万人に開かれた、博物館の一つの理想形です。「理想形」と書いたのは、それほどまでに「誰もが楽しめる」という目標は高く、尊いからです。私は恵まれています。なぜなら、未来の学芸員を育てる教育研究の現場で働いているからです。学芸員を目指す学生のみならず、未来を担う多くの学生にユニバーサル・ミュージアムの輪を拡げ、教職員や地域住民、近隣自治体をも巻き込んでいきたいと思います。

ひととの出会いが人生を変える

ところで、一九九四年に成城大学文芸学部芸術学科に入学した私は、高校も大学も補欠合格でした。補欠で二浪の負い目を感じつつ大学生になった私は音楽の世界に憧れバイトに明け暮れていました。失恋も重なり大学を休みがちになったのは二年生の頃からです。留年の危機を感じ、三年の夏休み前に先生の研究室を訪ねましたが不在でしたので置手紙をドアの下の隙間から放り込みました。すると数日経って先生から一通の手紙が届きました。「秋学期は一日も休まずに出席しなさい」と書かれていました。秋学期から真面目に先生の講義を受け、そこではじめて日本近代美術史の面白さや奥深さ、勉強することの楽しさを学びました。卒業後もふらふらしていた私に、鏑木清方記念美術館でアルバイトをやってみないか、と声をかけてくれたのも先生でした。私のその後の人生を決定づける瞬間でした。私は大学院に進学し、現職に就いてからも鏑木清方の研究を続け、今では友人と立ち上げた美人画研究会で研究会誌を発行したり、鏑木清方の研究者の一人として雑誌や画集などに原稿を書かせてもらえたりするまでになりました。

恩師との出会いがその後の人生を変えるというのは私に限ったことではなく、学部生やこれから進学する高校生のみなさんにも言えることです。大切なのは自ら考え、積極的に行動することです。真剣な気持ちは必ず相手に伝わります。あなたのことは、遠くからいつも誰かが見てくれているものです。成城大学には今でも、そんな素敵な先生がたくさんいるのです。

大学・大学院での学び

現在、私は兼務で学内の松前記念館（東海大学歴史と未来の博物館）の学芸業務を担当しています。学部

時代に日本近代の美術やその社会背景について勉強したこと、大学院で学んだ専門的な知識や技術は、実物の取り扱いや資料を読み解く上で大いに役立ちました。大学院では専攻する日本美術史だけでなく、東洋美術史や西洋美術史、美学、民俗学の講義なども積極的に受講しました。登壇者の高橋さん（当時はドレッドヘアーでした）と一緒に西洋美術の先生のスキー合宿に参加したり、学会の懇親会後にみんなで歩いて美学の先生のご自宅まで行きそこでまた二次会をやらせてもらったり、日本美術の先生と呑み明かし先生の靴を間違えて履いて帰ってしまったり、失礼なこともたくさんしてしまいましたが、そこで育まれた人と人との交流や絆が、私にとっては、人生を生きていく上で重要な人間としての核の部分を形作っていったように思います。

学芸員には幅広い知識や技術だけでなく、多様なものの見方、考え方も必要ですが、一番大切なのは、人と人との信頼関係や絆を育むことです。それができる人は、博物館資料に対しても愛情、愛着を持って接することができるのです。

【写真１】

学芸員の仕事

さて、当館で開催中の特別展「古代エジプト　受け継がれる祈りの心」では、大学コレクションのヒヒの神像を展示し、そのレプリカの再現的展示のために友人の彫刻家の協力を得て、祠の造作にもチャレンジしました。スタイロフォームという建材を重ね合わせて電熱線で造形し、石スプレーをかけて本物の石の祠のような模型を作る作業で、電飾による揺らぐ蝋燭の灯りも再現しました【写真１】。造作の仕事は外注するのが一般的で、学芸員の仕事ではないかもしれませんが、当館では展示台の制作も学芸員が担当しています。予算が少ない分、色々と創意工夫の発想も広がり、楽しみながら仕事をしています。「できない」ではなく限られた予算のなかで「できる」ことを探し、工夫して乗り切ることも大切です。

当館ではユニバーサル・ミュージアムの実践にも力を入れています。二〇二〇年からは神奈川県との協働による「ともいきアートサポート事業」の一環として平塚盲学校や伊勢原支援学校などと連携し、学生の体験的な学びの場にもなっています。障害の程度や状態にかかわらず、誰もが文化芸術を創作したり鑑賞したり発表する機会の創出や環境整備を行う事業で、児童や生徒は大学コレクションの古代アンデスの遺物を触って鑑賞したり、肌で感じたその直感に基づき新たな作品を制作したり、屋外彫刻のメンテナンス【写真２】にチャレンジしたり、触覚による鑑賞活動や保存活動を創作活動につなげて実践しています。

文化芸術を守り伝える大切な仕事

ユニバーサル・ミュージアムは単なる障害者対応、弱者支援ではありません。視覚偏重の近代化の過程のなかで人類が失ってしまった感覚の多様性、とくに「触覚」を取り戻すための壮大な実験装置でもあります。触覚による鑑賞は、作品の劣化に繋がるという考え方があります。確かにそれは事実です。他方、作品を美術館のガラスケース越しに見て「消費」することに慣れ切ってしまった私たちには、それらを守り伝えていく担い手としての意識が芽生えるきっかけが少なかったことも事実です。手で触るという営みは、触る対象、モノに対する愛情、愛着を育みます。合理的・効率的に生産されたモノを目でみて大量に消費する時代から、本当に大切なモノを手で触って楽しみ、肌で感じながら大切に守り伝えてゆく、そうした人にも自然にも環境にも優しい博物館が、共生社会の実現を後押しするのだと思います。

二〇一八年の文化財保護法の改正により、文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりでその継承に取り組んでいくため、市町村における文化財保存活用地域計画の制度が規定されました。「触覚」による鑑賞は、地域の文化芸術の新たな魅力を発見するだけでなく、それらを大切に守り伝える担い手の育成にもつながることが期待されます。学芸員の仕事は、今を生きる人びとをいかに巻き込むか、の仕事でもあります。多くの人と協力しながら、過去から引き継いだ歴史や文化、芸術、自然を未来へ守り伝える、やりがいのある仕事です。

【写真２】

学芸員になってぼんやり考えたこと

学芸員課程ニュースレターで、学芸員の魅力や自信の経歴、経験を書くなんて、自分に何ができて、何になれるか、なんて考えているようで考えていなかった学生時代からすると、そちら側になるとは。と書きはじめる前から、昔を思い出していたら若干、前のめりになる気がしてきたので、何てことはない、取るに足りない程度のものとして、読んでいただきたい。

どうして学芸員になったかと尋ねられたら、思い返すと、気づいたときにはジャンルを問わず「美術というものをみるのが好きだった」ということがきっかけで、たまたま自身のいた環境や出会い、時々の興味や好奇心、体験や経験が積み重なって、結果、紆余曲折あって日本美術史、特に近代を専門に学芸員としていま横浜市歴史博物館に勤務しているといえる。来るものはたまに拒んで、概ね受け入れながらやっている。ということは、それなりに魅力のある職業なのである。

そもそも成城大学に入学したとき文芸学部芸術学科で勉強する内容すら知らなかった。けれどそれでも、授業を受けはじめて日本美術史なる学問に初めて出会い、薬師寺の薬師三尊が神秘的で謎に包まれていること、画家の生涯や作品技法とその様式、作品の歴史的背景とそれらが当時の現代においてどのように受容されたかにワクワクして、学部三年の終わりか四年になるかならないかの頃、ぼんやりと美術に関わる仕事につければくらいに考えていたときに、学芸員という仕事を認識したのではないだろうか。なので「両親の影響で」、とか「幼少期の体験が」はたまた「劇的な作品との出会いが」といったこの類の文章で使われる美談は一切ないのは自分自身残念である。

修士課程へ進学したのは、もっと知りたいという「好奇心」が原動力だった。勉強はできなかったが、資料や作品の扱い方、美術作品が制作される社会背景やそれらがどのように機能したかといった専門的な知識と考え方を学べたことは感謝している。ただあまりにできがわるかったので当然、博士課程にも進学できず、かといってフラフラしているわけにもいかないので新聞社で派遣社員をして、その後図書館司書になった。それでも美術館・博物館に係りたいと考えるものの論文も書いていないし、たまたま募集のあった日本郵船歴史博物館という企業博物館に就職したのがキャリアのはじまりだ。その後、渋谷区立松濤美術館、そして横浜市歴史博物館に落ち着き今にいたる。やりがいを感じる時、気持ちが満たされる時、帯状疱疹がでるくらい辛い時もあったが、結果良かったことは、ライブラリー、企業博物館、美術館、公立博物館といった性質の異なる文化施設やミュージアムを経験し、仕事をするうえで様々な角度から物事を捉えることができることだ。人間は思った以上に経験しないこと、当事者ではないことに対して、理解や想像が及ばないものである。

ミュージアム業界に身を浸してから改めて感じさせられたことは、それは、どんな仕事に就いてもあたり前だが、人と人のつながり、多くの職業が係わり合いミュージアムは成り立っているという当たり前の社会の構造を実感したということだ。学芸員は美術・歴史・民俗・考古・自然科学系から水族館・動物園あらゆる分野があり、そのために必要条件であるのが学芸員資格であり、昭

和二十六年（一九五一）制定・公布された博物館法のなかに「博物館の専門的職員を学芸員」というこの一文に基づいている。博物館とは、一般にモノ「資料」を収集保管し、調査研究や展示を中心に教育普及を役割とした施設であり、学芸員一つとっても専門分野、所属館によってあり方は様々だ。ミュージアムに直接係る仕事という点では、職員の勤務管理、経理、設備、警備を担う人、受付スタッフやボランティアの方々がいる。また間接的には、図録やポスター・チラシのデザインやそれらを印刷をする印刷会社、展示ならば展示ケースや展覧会で使う額、作品を安全に展示するための道具を扱う会社、展覧会の造作物を作る施工会社、作品・資料を運ぶ美術品専門の輸送業者、作品・資料を保存するために必要な保存用の資材やそれらを直す修復のプロ、遺跡の発掘調査を請け負う会社もあるし、文化行政に係る地方自治体の文化財課の職員、データベースを開発管理するシステムエンジニア、文化財を専門に撮影するフォトグラファー、といった具合に一部をあげても多岐にわたり、広く文化に係るそして携わることのできる仕事は学芸員だけではなく、たくさんあるのだ。

「学芸員になるには何が必要ですか」と聞かれることがある。作品・資料を見て、想像して、疑問に思って、調べてを繰り返し、それを続けることと好きであることだと思う。お風呂に入っていると、素晴らしいアイディアが閃く。大切に覚えておいて、ペンを持ち書きはじめる前のちょっと気を許した瞬間、それを忘れてしまう。本当に大切なものは、なかなか手に入らないものである。将来の職業を選択する時、ややもすれば、シニシズム的な態度になりがちな、現代社会では、正しいこと、正解を求める傾向がある。何が必要で必要ではないかは、残念ながら受験勉強ではないので、わからない。そこに無駄があってもいいし、結果無駄にならない瞬間があればラッキーぐらいで、学ぶことを諦めないでほしいと思うし、それは「いつか何かを始めるためのスタートダッシュ」になるからと思うのである。

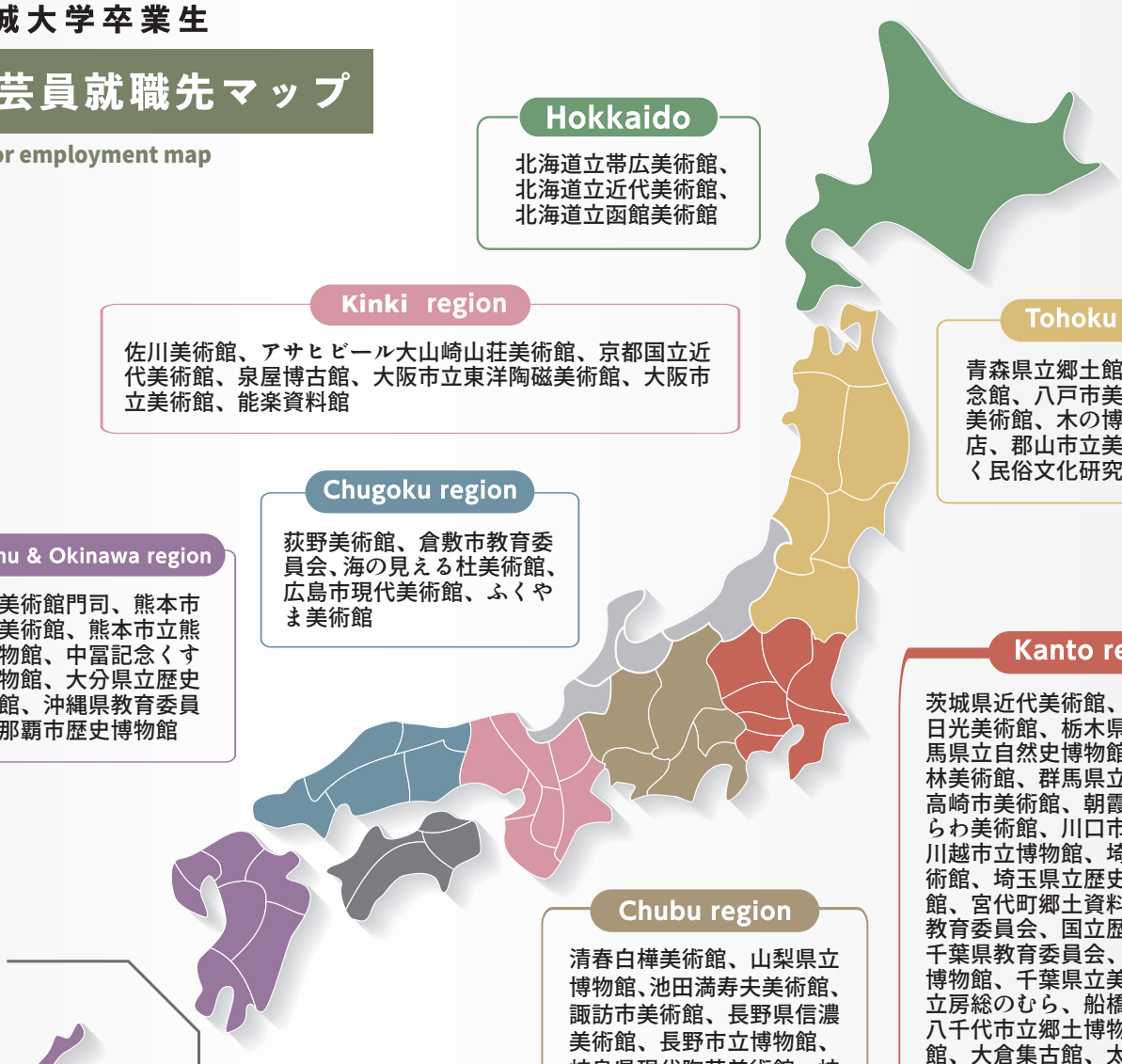
博物館の社会に対する役割は大きく変化している。二〇一九年の文化財保護法改正施行、文化財保存活用地域計画、観光立国をあげる日本において文化財をいかに活用することが問われ、博物館法が改正されミュージアム、そして学芸員にとっても文化の関わり方大きく問われる転換期である。けれども、美術、歴史、民俗、自然、広く文化に携わる仕事に携わることそれを目指し、もし将来の職業の選択肢に学芸員があるならば是非目指してほしいと思うのである。ICOM（国際博物館会議）刊行の『博物館組織』（国際博物館会議編 国際博物館会議日本委員会訳 国際博物館会議日本委員会一九六五）のなかで、ダグラス・A・アランは「すべての博物館の知的能力と活動はキュレーターの双肩にかかり、博物館が成功するか否かに関してその要因をあげていく時、キュレーターの個性が最も致命的な要因となる」という。そして「キュレーターは館を浴もすれば、悪くもする力の源である」という。現代のミュージアム事情からするとやや学芸員中心主義的な偏重さは否めないものの、ここには、学芸員が文化を守り継承する一翼を担う仕事であるという魅力がつまっていると思う。

よしいだいもん
横浜市歴史博物館学芸員

成城大学卒業生

学芸員就職先マップ

Curator employment map



Hokkaido

北海道立帯広美術館、北海道立近代美術館、北海道立函館美術館

Tohoku region

青森県立郷土館、棟方志功記念館、八戸市美術館、宮城県美術館、木の博物館吉成銘木店、郡山市立美術館、みちのく民俗文化研究所

Kinki region

佐川美術館、アサヒビール大山崎山荘美術館、京都国立近代美術館、泉屋博古館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立美術館、能楽資料館

Chugoku region

荻野美術館、倉敷市教育委員会、海の見える杜美術館、広島市現代美術館、ふくやま美術館

Kyushu & Okinawa region

出光美術館門司、熊本市現代美術館、熊本市立熊本博物館、中冨記念くすり博物館、大分県立歴史博物館、沖縄県教育委員会、那覇市歴史博物館

Kanto region

茨城県近代美術館、小杉放菴記念日光美術館、栃木県立博物館、群馬県立自然史博物館、群馬県立館林美術館、群馬県立歴史博物館、高崎市美術館、朝霞市博物館、うらわ美術館、川口市教育委員会、川越市立博物館、埼玉県立近代美術館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、宮代町郷土資料館、我孫子市教育委員会、国立歴史民俗博物館、千葉県教育委員会、千葉県立中央博物館、千葉県立美術館、千葉県立房総のむら、船橋市教育委員会、八千代市立郷土博物館、出光美術館、大倉集古館、太田記念美術館、小川美術館、国文学研究資料館、国立西洋美術館、汐留ミュージアム、渋谷区立松濤美術館、静嘉堂文庫美術館、世田谷区立郷土資料館、世田谷区立次大夫堀公園民家園、泉屋博古館分館、タイムドーム明石（中央区立郷土天文館）、大東急記念文庫、たばこと塩の博物館、東京国立近代美術館、東京国立博物館、東京ステーションギャラリー、東京都江戸東京博物館、東京都写真美術館、東京都庭園美術館、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館、日本書道美術館、ニューオータニ美術館、根津美術館、練馬区立美術館、八王子市郷土資料館、府中市美術館、ブリヂストン美術館、文化庁、松岡美術館、三井記念美術館、目黒区美術館、山種美術館、厚木市郷土資料館、神奈川県立歴史博物館、鎌倉国宝館、鎌倉市鏑木清方記念美術館、川崎市市民ミュージアム、川崎市立日本民家園、そごう美術館、松前記念館、玉川文化財研究所、横浜美術館

Chubu region

清春白樺美術館、山梨県立博物館、池田満寿夫美術館、諏訪市美術館、長野県信濃美術館、長野市立博物館、岐阜県現代陶芸美術館、岐阜県美術館、上原美術館、MOA 美術館、静岡県立美術館、愛知県美術館、豊田市美術館

Shikoku region

愛媛県美術館、高畠華宵大正ロマン館、香川県立ミュージアム

※名称は卒業生の就職当時のものです。

★ 47 都道府県中 31 都道府県に就職（66.0%））
★面積カバレッジ 70.1％

【編集後記】

物事を素直にとらえることは難しい。テレビの画面にニュースキャスターとコメンテーターが写っている。画面にはニュースのセットとニュースを読み上げる人が映っているのみである。視点を少し変えると画面の外、スタジオの周りにはカメラがあり、音声、音響、AD やプロデューサー、見学している人もいるかもしれない。ニュースで映し出された VTR にはそれを撮影し編集しテロップを入れ音声がいれられる。そこにも複数の人たちが多様に関わっていることは、なかなか意識しても気づかないものである。見ている、聞いている、知っている事が全てではない事、箱庭の外には世界が広がり、箱庭すらも作られたかもしれない。という想像力を学芸員を目指す学生も目指さない学生も、そしてこれから将来の仕事を考えようとする学生には持ち続けてほしいと思う。本号は、成城大学文芸学部創設 70 周年記念事業 学芸員課程創設 50 周年記念シンポジウム開催にあわせて、登壇いただく本学出身の先輩がたに、寄稿をいただいた。諸先輩のそれぞれ語る言葉にはどんな経験が裏付けられているのか想像をめぐらせて読んでいただければと思う。　(Y)

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 08
Seijo University Curator Course NewsLetter

発行：成城大学学芸員課程委員会　157 － 8511　東京都世田谷区成城 6 － 1 － 20
TEL 03 － 3482 － 9045　mail：gakugei_nl_s@seijo.jp
編集担当　吉井大門　篠原 聰　　2023 年 9 月 30 日 発行